

「情報の伝達と情報の分析」

展示品解説

「経済学図書館の100年」（東京大学経済学部創立百周年記念展示）の前期展示終了後、後期展示開始までの期間（12月2日(月)より13日(金)まで）、以下の資料を特別に展示します。いずれも時宜に適った貴重な資料です。この機会にぜひご覧ください。

浅田家文書 ～ 江戸時代の情報伝達 【展示番号1～2】

浅田家は、山城国相楽郡西法花野村（現京都府木津川市山城町上狛）に居住し、西法花野村の庄屋や加茂組の大庄屋を務め、百数十石を所持する豪農であった。17世紀後半には、一族の平兵衛が江戸に店舗を開き、国元の当主金兵衛と連絡を取り合いながら、生薬の一種である地黄を領主の津藩藤堂家に納入していた。浅田家文書は1950年代前半に東京大学経済学部に寄贈され、総点数1万8千点余を数える大文書群であり、経済学図書館のウェブサイト「浅田家文書検索」（<http://www.computer-services.e.u-tokyo.ac.jp/lms/asadake/>）から検索が、経済学部資料室で閲覧が可能である。

今回展示した二通の書状は、元禄15年(1702)12月16日付けで、平兵衛の下で働いていた浅田孫之進（続L-292-36）、内垣平三郎（同37）の各人から、国許の浅田金兵衛に出されたものである。前半部は、不作による津軽藩士の経済的困窮（同36）、江戸の尙替相場や米・大豆相場（同37）といった商業情報を記す。

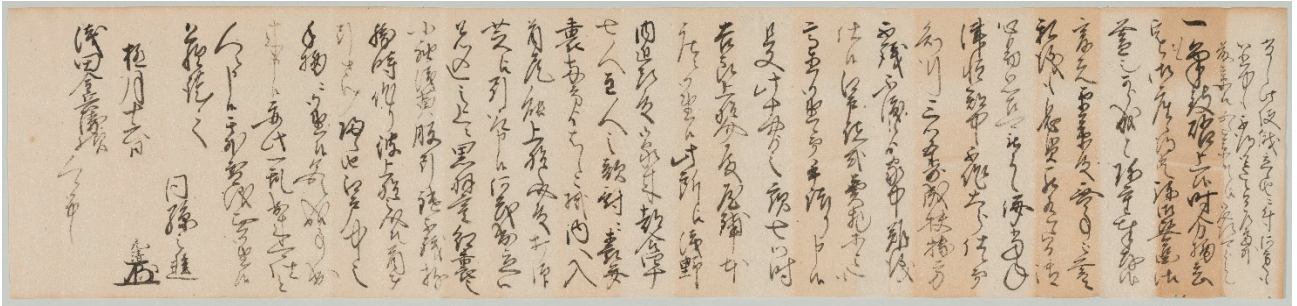
後半部は、江戸城松の廊下で高家の吉良上野介義央に切り付け、切腹及び断絶の処分を受けた赤穂藩主浅野内匠頭長矩の仇を果たすべく、本所（現東京都墨田区）の邸に討ち入った四十七士の行動を、その翌日にいち早く知らせている。表が黒羽二重で裏が紅色の小袖、浅黄（薄い黄色の）股引、鐘といった四十七士の装束や、吉良屋敷に梯子をかけて侵入し、上野介の首を取り勝どきの声を挙げた行動を、江戸市中の伝聞情報であるガリアルに記している。なお、解読の便のために読み下し文を付した。

年末の風物詩である「忠臣蔵」の世界に思いを馳せていただければ幸いである。

参考文献

小川幸代「忠臣蔵の世界」（所理喜夫編『古文書の語る日本史6 江戸前期』、筑摩書房、1989年）

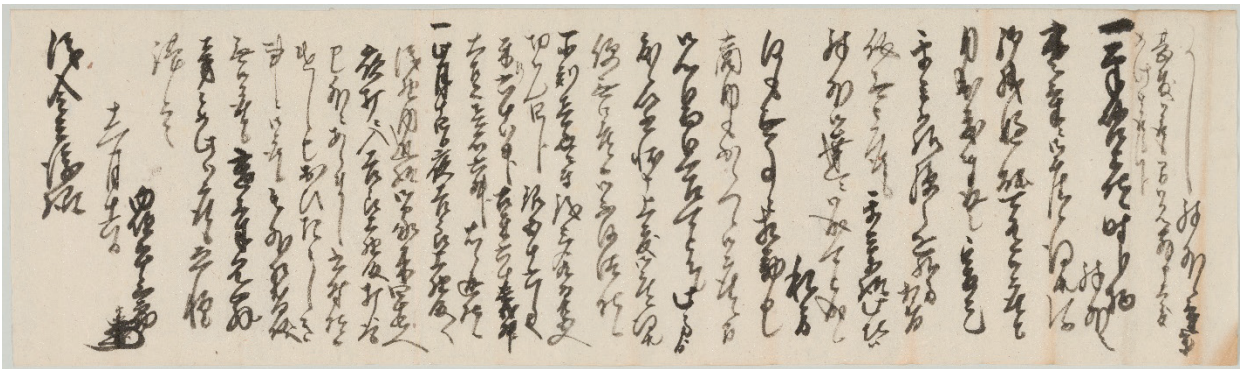
石井寛治・林玲子編著『近世・近代の南山城一綿作から茶業へ』東京大学出版会、1998年



尚々此便俄に立て候由に付き、何方へも書中を以て御意を得ず候間、慮外乍ら藤兵衛様、五郎兵衛様へ御心得くだ一筆啓上致し候、時分柄甚寒に御座候得共、弥御堅固御暮シ成さるべくと珍重に存じ奉り候爰元平兵衛殿無事に暮され、私儀も息災に罷り有り候間、御心易く思召下さるべく候、併当年津軽郡中不作大分仕り候て、知行三ツ五歩成る扶持方残らず渡らず候より、家中難儀仕り候、江戸諸式売物等迄も高直に御座候て、手詰り申し候且又此十四日の夜七ツ時、吉良上野介殿屋鋪本庄(上)に御座候、此所浅野内匠頭殿御家来都合四十七人、主人の敵討に表并裏両方よりはしこ掛け、内へ入り、首尾能く上野介殿打ち仰し、芝え引き取り申し候、何も出立ハ着込の上に、黒羽重紅裏の小袖、浅黄股引、鍮残らず持ち、勝時作り、彼の上野介様首ヲ引きさけ帰り候由、江戸中の手柄に御座候、色々成る事出来申し候、亦此一乱出来仕るべくと人々申し候、其の外替る儀御座なく候、恐惶謹言

極月十六日
浅田金兵衛様
人々御中

同孫之進
充清(花押)



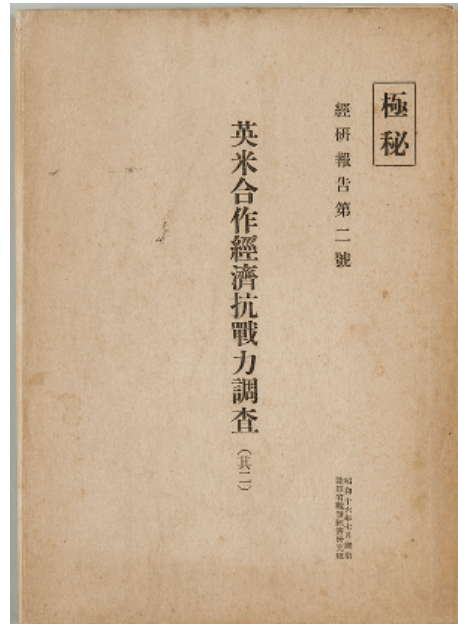
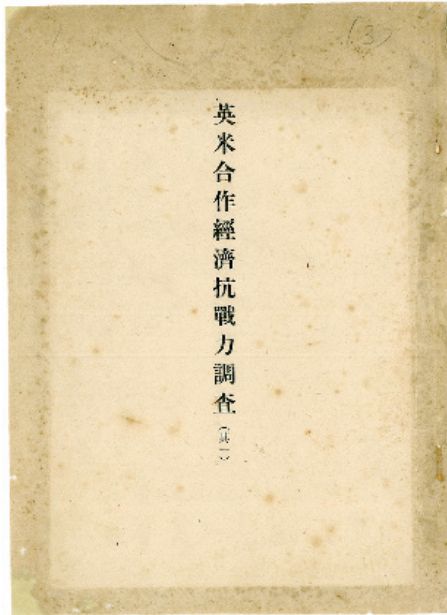
尚々殊の外寒気甚敷、御座候間、御見舞申し上げ度、此の如くに御座候、以上一筆啓上仕り候、時分柄寒気に御座候得共、弥御機嫌能く御座有るべくと目出度く存じ奉り候、爰元平兵衛様、孫之進様方あい替わる儀御座なく候、平兵衛様此比ハ殊の外御違に御成り成るべく候私方

何れも無事にあい勤め申し候商内も少々つゝ御座候間、御心易く思召し下さるべく候、此方より度々書状を以て申し上げ度く御座候得共、便り御座なく候て、御不沙汰仕り候小判老両に付き銀三貫九百廿五文、切ちん四分、銀五十六匁、米新六斗八升、古米六斗壹式升、大豆壹石六升、右の通り仕り候一此月十四日夜、吉良上野殿へ浅野内匠様御家来四十七人夜打ち入り、吉良上野殿打ち取り申し候、外にあらまし書付仕り候て遣わし申し候、おひたしき事に御座候、其の外あい替わる儀御座なく候、寒気見舞旁々此の如く御座候、恐惶謹言

十二月十六日
内垣平三郎
宗春(花押)

浅田金兵衛殿

『英米合作経済抗戦力調査』と関連資料群 ～ 太平洋戦争前の情報戦【展示番号 3～5】



昭和 14 年（1939）、陸軍省は経済謀略機関として戦争経済研究班を設置した。活動内容を伏せるため対外的には「陸軍主計課別班」と称されたので、展示の報告書の多くもこの名称が使用されている。一般には、責任者であった秋丸次朗^{あきまる じろう}主計中佐の名前をとって秋丸機関と通称される。

秋丸機関では、当時の一流の経済学者を動員して日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリアなどの戦争遂行・継続能力を、経済的な観点から分析した。最終的に陸軍はこれらの結果を日本の軍事作戦に役立てようと考えていたのである。秋丸機関には地域別に複数の研究班が組織され、その一つの英米班の中心は、若き日の有沢広巳^{ありさわひろみ}（本学部名誉教授）であった。秋丸機関における成果は、「経研報告」や「抗戦力判断資料」というシリーズ名のもと、順次、謄写印刷^{とうしや}（ガリ版刷）により内部刊行された。

ここでは、英米班と独逸^{どいつ}班の各種報告書 13 点を展示する。その内訳は各国を単独で分析したものが 11 点（英国 3 点、米国 2 点、独逸 6 点）、英米を総合的に検討したものが 2 点である。なかでも貴重なのは、後者の『英米合作経済抗戦力調査』の 2 冊であり、本館以外に所蔵をみない。本来はこの 3 冊目として「戦略点検討表」があったとされるが（展示番号 5 の展示品見開きの記述参照）、まだ発見されていない。

これらの報告書の中で、『英米合作経済抗戦力調査』其一のみは体裁も異なり、「経研報告」や「抗戦力判断資料」といったシリーズ名も付されていない。この書は有沢の死後にその旧蔵資料から発見されたものしか現存していないので、これまで幻の報告書とされ、判決（最終報告）部分が日本に不利な内容となっていることから、陸軍の意に沿わず焼却されたというのが定説であった。



しかし最近になって、本学部の卒業生でもある牧野邦昭氏（摂南大学准教授）が、これら一連の秋丸機関刊行物を博搜して多角的に分析し、『英米合作経済抗戦力調査』の内容は他の情報と比べてさほど問題のあるものではなかったため、逆に放置されてその存在が稀になったものと結論づけている。なお、『英米合作経済抗戦力調査』其二は、牧野氏が発見・入手し、本館に寄贈されたものである。

参考文献

牧野邦昭『『英米合作経済抗戦力調査』(陸軍秋丸機関報告書)』『東京大学経済学部資料室年報』9、2019年
牧野邦昭『経済学者たちの日米開戦—秋丸機関「幻の報告書」の謎を解く—』新潮社、2018年

(小島 浩之)

※展示会場は図書館閲覧室内ですので、一般の図書館利用者のために静粛な環境の維持にご協力くださいますようお願いいたします。

解説執筆：富善 一敏 小島 浩之
発行日：2019年12月2日
編集：東京大学経済学部資料室
発行：東京大学経済学図書館
<http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/>
Instagram @utokyo_rhco